

## 二条城

藤田和樹

(2019 年度入学 鈴木ゼミ 3 期生)

二条城は、1603 年に江戸幕府初代将軍徳川家康によって、天皇の住む京都御所を守る目的で築城された。この城は、京都市に存在する多くの寺社仏閣と同様に長い歴史を持つ。しかしその内装はそれらと比較してもより豪華絢爛なものである。なぜならこの城は将軍が上洛する際の宿泊も主な用途だったからだ。また 3 代家光の時代、後水尾天皇行幸のために大規模な改修が行われ、城内部にある二の丸御殿はより壮麗なものとなった。そのため、二条城には随所に将軍や天皇への配慮として、貴重な品物や技術があしらわれている。また、それらの多くは現在もそのままの形で存在している。



まず、正門が一重の門であることが挙げられる。建築当初は櫓門と呼ばれる 2 階建ての構造をとっていた。しかし行幸の際に、天皇を 2 階から見下さないようにするための建て替えが行われた。

次に、唐門の装飾である。唐門は城の正門をくぐり、二の丸御殿に入る前にある門の



ことである。この門には切妻造や唐破風、檜皮葺のような技術に加え、極彩色の彫刻も用いられている。切妻造や唐破風は屋根にみられる建築技法であり、特に唐破風は日本固有のものである。檜皮葺は日本古来の歴史的技法で、ユネスコ無形文化遺産に登録された「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」に含まれている。

二の丸御殿は、遠侍、式台、大広間、蘇鉄の間、黒書院、白書院の 6 棟が雁行形に並び、33 の部屋が計 800 畳で構成される。御殿は将軍と公卿の公式の対面所や将軍の寝室も有しているため、城の中でも特に豪華に装飾されている。このような御殿は江戸城、大阪城、名古屋城などにも存在していたが、すでに失われてしまった。現存する日本の御殿は、本丸御殿は高知城と川越城の 2 つ、二の丸御殿は二条城と掛川城の 2 つしか存在しない。そのため二条城の二の丸御殿は、国内城郭に残る唯一の御殿群として、1952 年に国宝に指定された。



二の丸御殿全体の工夫として、鶯張りというものがある。これは御殿の廊下の床板に釘が露出しないためのものである。通常は床板と補強のための根太が釘で繋げられ、その釘は露出してしまう。しかし目かすがいを床板に埋め、空けられた穴にくぎを刺し、根太とつなげる。これにより、釘の跡を見せずに、床板を補強することができる。また、この穴と釘のこすれによって生じる音もこの鶯張りの特徴である。これは、侵入者防止のために当初から意図されていた説と穴の経年劣化が原因である説の2つの説がある。

御殿の部屋は、狩野派によって四季折々の花の障壁画が描かれている。御殿の6つの部屋にはそれぞれ役割があるが、どれも一番格式の高い大広間の一の間を引き立たせる働きを持つ。

1つ目の遠侍という部屋は、最も入り口に近く、来殿者たちが控える場所として使用されていた。部屋は御殿最大の建物であり、ふすまや壁に虎が描かれている。このような壮大な空間と獰猛な絵は、来殿者に徳川家の権力の大きさを感じさせた。

次の式台は、将軍への要件や献上物を取り次ぐ場所であり、式台の間と老中の間の2つで構成される。障壁画には、永遠に続く繁栄を表すおめでたい植物である松が描かれる。

その次が御殿で最も重要である大広間で、部屋は一、二、三、四の間で構成される。

大広間の一、二の間は、主室であり、将軍と大名や公卿集が公式で対面する場所である。1867年の大政奉還はこの場所で行われた。一の間に将軍が座り、二の間へ南面する形は、京都御所紫宸殿の天皇の座る玉座と同じ形がとられている。一の間正面と東西に描かれる松は、二の間から一の間を見た際に将軍が厳格な存在であることを思わせるためである。この松は将軍へと伸びており、松が将軍を守護することも表している。さらに一の間よりも二の間のほうが一段高くなっており、一の間の中でも将軍が座る場所とその天井は1段高くなっている。この天井は折上格天井という。将軍の座る一の間には、ほかの部屋と比較しても特に格式の高い部屋となっている。



部屋は書院造の特徴である床の間や違い棚、帳台構に加えて、長押や扉の飾り金具に花熨斗型飾り金具が用いられている。長押とは壁に上下の境を示すものである。この飾り金具は近世建築の飾り金具で最大のもので、御殿でも大広間と黒書院にのみ用いられている。

黒書院は大広間に次ぐ公式の場となっている。将軍と徳川家に近い大名や高位の公卿が対面した。黒書院もほかの部屋よりは厳格なものとなっているが、大広間と比較すると厳格さは薄れたものとなっている。大広間は長押を貫いた大樹が壁に描かれているが、黒書院は長押を境に2つの絵が描かれている。折上格天井においても、大広間は2

重であるが、黒書院は1重であり、黒書院の一の間の天井は高くなっていない。

白書院は、将軍の寝室の役割を持つ。一の間と二の間の間に襖があり、プライベート空間が重視されたものとなっている。これは座った状態での景色が湖上に浮かべた船からの景色に見えることからわかる。

蘇鉄の間は行幸を機に、本州では珍しかった蘇鉄を佐賀県から献上し、二条城へ植樹したことがきっかけで作られた。現在もその蘇鉄は庭園内に存在しているが、どれであるかは不明である。

このように、現存している正門や唐門、二の丸御殿だけでも随所に将軍や天皇への配慮が施されていることがわかる。そのうえ、城には庭園や現在改修中の本丸、落雷によって焼失してしまった天守閣の跡地なども存在する。このことから、当時の人々がいかに彼らに敬意を抱いていたのかがわかる。そしてそれが現存、改修中であることは今までの人々が彼らに敬意を抱いていることがわかる。

